

## 子どものレジリエンスを育てる」ーナラティブからレジリエンスへー

～「第5回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」報告～

2016年8月11、12日 愛知県・岩倉市生涯学習センター

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

### はじめに

ここ数年、発達障害者支援法の支援の対象に吃音が含まれた認識が広がってきたこともあってか、吃音に関するニュースが新聞で取り上げられ、テレビ番組でも特集されることが増えてきた。また、どもる人を主人公とするドラマ「ラブソング」が2016年4月から6月まで全10話で放映された。しかし、これらの報道等は世間の耳目を集めるためにセンセーショナルに、あるいは面白おかしく構成され、どもる子どもをもつ親に少なからぬ動揺を与えているように思う。

今回の吃音講習会の実行委員長、愛知県岩倉市立岩倉東小学校の奥村寿英さんもその認識と危機感をもつ一人だ。吃音の課題がどこにあり、ことばの教室の役割はどこにあるのかを、この講習会が提唱するナラティブやレジリエンスのプリズムを通してしっかりと考えたい。それはこの7月に開催された全国難聴・言語障害教育研究協議会全国大会・島根大会のテーマである「暮らし」という視点とシンクロするに違いない、という奥村さんの挨拶で5回目を迎える吃音講習会が始まった。

### 基調提案① 「吃音にとって、なぜレジリエンスなのか」 日本吃音臨床研究会 伊藤伸二さん

**伊藤伸二さんの歩みから** 「伊藤さんはいつも自分の話をしている」とは2回目の講習会の講師、九州大学の高松里さんの言葉だ。伊藤伸二さんが話すのは自身の経験と多くのどもる人たちとの出会いの中から紡ぎ出され、鍛えられた言葉である。エビデンスに基づく言葉、考え方なのだ。

伊藤さんが語る吃音ストーリーの転機は2つある。最初は小学2年の秋、どもりながらも明るく快活な伊藤少年は学芸会の主役は自分であると思っていたのだが、「どもったらかわいそう」の配慮からか、台詞のある役から外された。これを伊藤少年は「どもりは悪い、劣った、恥ずかしいもの」のレッテルとして受け止めた。以来、伊藤少年の明るさは影を潜め、どもりから逃げ続け、消極的で万事に覇気のない、アドラー心理学という劣等コンプレックスに陥った学校生活を送った。

二つ目は21歳のとき。「どもりが治らなければ

人生は開けない」と東京正生学院という民間吃音矯正所に入所し、一所懸命に治療と称するプログラムに取り組んだ経験だ。伊藤さんを含め、300人全員が治らなかった。治ったと退所した人も再び戻ってくる事実に出会い、言語訓練結果を日常生活に活かすのは無理だと、治すことは諦めた。

しかし、合宿を通して同じような課題をもつ人たちとの語り合いの経験を伊藤さんは「まるでお祭りのようだった」と述懐する。吃音であれば皆、同じように悩み、人生に歩み出せずにいると思っていたのに、家族をもち、職業人として社会生活を送っている人との出会いは当時の伊藤さんには驚きであった。どもってれば就職できないという思い込みから解放され、それが吃音に対する自身の態度を変化させ得ることを知った。この驚きに導かれて、伊藤さんは大阪教育大学の教員時代に全国吃音巡回相談会というキャラバンに出かけ、苦労はしながらも自分の人生を歩んでいる多くの人たちと出会い、人はどもりとともに生きていけるという吃音哲学を掴むことになる。異口同音という言葉があるが、同じどもりという課題をもち、そこで共感できる「同音」のメンバーでありながらも、吃音や吃音から受ける影響である人や社会、人生との向き合い方は驚くほど違うという「異口」の多様性を知った。

こうした経験が伊藤さんをセルフヘルプグループ活動へ向かわせた。グループでの語り合いは伊藤さんたちにどもりながらも人生の課題に向き合い、それなりに対処してきた、サバイバルしてきた事実を発見させ、自信を与えた。自らを縛っていたドミナント・ストーリーから、それとは別の隠れていたオルタナティブ・ストーリーへと自分の吃音ストーリーの書き換えが共同の作業として行われていった。また、伊藤さんは精力的にグループの活動を企画、実行、リーダーシップを発揮していった。吃音から逃げたいばかりに学校生活を投げやりに過ごし、生きもの係とかクラスの委員を何一つ担ってこなかった伊藤さんは、エリクソンが学童期までに獲得すべきものとしてあげた自発性、勤勉性などの性向をこうしたセルフヘルプグループでの活動を通して育てていくことができた。これらは逆境の中にあっても自身を支え、回

復させていく力であるレジリエンスと考えることができるものだろう。

この講習会はナラティブとレジリエンスを方法論の柱としている。心理学や精神医療、教育、福祉等の領域で最近注目を集めている思潮に乗ったのではなく、伊藤さんの吃音の課題への取り組みの軌跡、セルフヘルプグループで実践し培ってきたものが、言葉こそ知らなかったもののナラティブとレジリエンスという概念、方法で吃音と向き合ってきたことを発見したのだ。時代の思潮が伊藤さんに追いついたのだ。

**アメリカ言語病理学を超えて** 伊藤さんが日米の研究者、臨床家が見過している、アメリカ言語病理学の精髓であるウェンデル・ジョンソンの言語関係図やジョセフ・G・シーアンの吃音氷山説の問いかけるものを受け継ぎ、発展させているのはその理論を知る前に既に自身の経験の中から、そのエッセンスを掴んでいたからに違いない。

伊藤さんはアメリカ言語病理学や日本のほとんどの研究者、臨床家が唱える吃音を「治す」、「軽くする」という方向は「根拠のない楽天主義」だと喝破する。いつか治る、コントロールできるようになる、よい治療法ができるはずだなどの期待はその人の人生を無駄に足踏みさせるだけだ。吃音の悩みの本質はどもることを言い訳にして、本来向き合わねばならない、学びや恋愛、仕事等の人生の課題から逃げ続け、自身の人生に歩み出せなかったことにある。最新の言語訓練とされるバリー・ギターの「ゆっくり、そっと、やわらかく」の不自然な話し方にしかならない流暢性形成技法は、どもる人の誰でもが教えられなくても思いつき、試み、失敗している方法なのだ。こうした訓練で、どもり方が多少軽くなったとしても、それはさらに吃音を隠し、逃げることへとつながり、吃音に囚われ続けることになりかねない。悩みは深くなるばかりである。これは他の領域の課題や障害といわれるものとは異なる吃音独特のメカニズムである。どもる状態の軽減にほとんど意味がないことに臨床家は気づいてほしい。

シーアンは吃音を非流暢性の問題として考える専門家は無責任だと指摘している。流暢性の獲得は間接的にもたらされることを知る必要がある。それに、吃音の課題はライフステージごとに変わること考えたとき、流暢性にこだわることにどれほどの意味があるのだろうか。大阪吃音教室にはそれまで会社でそれなりにやっていたものの、職制が上がって会議の司会で、「起立、礼、着席」が言えないとの悩みで扉を叩く人が毎年のように参加する。普段はあまりどもらないので、人前で

短いことばをどもりたくない。これを伊藤さんは、「どもれない苦悩」という。少しどもっても、と思えば司会ではできるはずだが、これまで隠してきた吃音を、人前でさらしたくないのだ。この背景には学童期の音読でどもって、からかわれて恥ずかしかった経験があって、どもると評価されないという思い込みに支配されたストーリーを生きてきたのだろう。吃音そのものに悩むのではなく、吃音否定の物語に悩んできたのだ。吃音という問題とその影響を分けて考え、否定の物語を肯定の物語に書き換えることが求められる。ナラティブ・アプローチを学ぶ意味はここにある。この人に必要なのは言語訓練ではなく、言語関係図のZ軸、自身の吃音に対する態度へのアプローチなのだ。

伊藤さんが提唱するのは「根拠ある楽観主義」だ。学資と生活費を稼ぐためにありとあらゆるアルバイトを体験した伊藤さんが得たのは「どもってできないことは何もない」の現実だ。アナウンサー、落語家、刑務官、営業職、医師、教員等、ありとあらゆる職業にどもる人は就いている。治したいと思っている人も、既にどもりとともに生きているのが事実だ。不本意ではなく、納得してどもりとともに生きていきたいものではないか。

伊藤さんはそれをセルフヘルプグループで実践し、大勢のどもる人々とともに歩んできた。アメリカ言語病理学の吃音を治すための言語訓練が難行苦行だとしたら、物語を書き換え、そのことを通して自身の強みであるレジリエンスを発見し育てていくこと、そのために自分の人生を丁寧に大切に生きることは、どもる決心と覚悟があれば誰にでもできる易行だと伊藤さんは楽観的だ。しかし、易行は原則的でシンプルだけに、時、所、人で伝え方にバリエーションが求められる。明快な教えを説くイエスや仏陀の話が喩えて満ちるように。

最近の伊藤さんは講演等を行う際、十分に話を練り、レジュメを準備しながらも、いざ話す段階になると、参加者の顔を見て、その反応に呼応しながらその場で思いついた言葉、エピソードを語っている。それはひとつの言葉が次の言葉を喚起し、ひとつのエピソードが次のエピソードを想起させる流れるような場、時間だ。どこに辿りつくのかわからないミステリー・ツアーだが、私は安心して参加している。第一回吃音問題研究国際大会を主催した頃の伊藤さんは大学教員として人前で話す機会が増え、講義、講演等ではほとんどどもらなくなったというが、自在さに欠ける話しぶりではなかったかと想像する。伊藤さんはその話し方、言葉を竹内敏晴に壊されたエピソードを嬉し

そうによく語る。竹内敏晴が伊藤さんに伝えたかったのは、言葉はその場の共同の営みとして発せられ、生成されていくものであることではなかったか。その場で生まれた言葉が言いにくい音であり、どもる波がくればよくどもることにはなるだろうが、その話は自由自在であり、参加者にはよく伝わる言葉、話となるだろう。ミステリー・ツアーが心地よく、伊藤さんの思考に聞くほうも参加しているようなライブ感があるのはそれゆえだ。

**語るべき物語** 現在、東京で消防士として働く兵頭雅貴さんは小学2年の彼に薬を処方する医師の対応に不安を抱いた母親が伊藤さんに相談したことがきっかけで、どもる大人のための、大阪吃音教室に小学5年から参加した青年だ。点呼や号令がつきものの消防学校時代の教官からの「どもりを治せ」や「そんなことで東京都民の命が守れるのか」と理不尽な叱責に耐え、初志を貫けた兵頭さんは小学校の頃に日記をつける習慣をもっていた。日記を書くことを通して、自己の体験や気持ちを整理し見つけた。それはウォーリンがレジリエンスとして挙げる「洞察力」を培うことになっただろう。辛い体験に飲み込まれることなく耐え、凌ぐことができたのには彼が大阪吃音教室のプログラムである論理療法をその洞察力ゆえに深く理解し、適切な感情と不適切な感情を分けるなどのことができたことも支えになったのだろう。辛い時期にサマーキャンプの事前レッスンに参加して、身体を動かし声を出して、自身を確かめていた彼の姿を思い出す。彼にきっかけを与えた親の、多くの情報の中から伊藤さんをキャッチした力、一所懸命にレッスンに参加する彼をそれとなく見守り、声をかける仲間が存在。レジリエンスも言葉と同様、こういう共同の営みの中で見出され、育まれていくものだろう。

兵頭さんはいまでも点呼等は苦手らしいが、訓練には人一倍励み、消防技術、体力では一目置かれた存在だ。スキャットマン・ジョンはどもりを逆手にとって彼オリジナルのスキャットで一世を風靡した。全難言・島根大会で、ある小児科医が、発達障害を「何々の苦手」と表現していた。

吃音を、言語障害というより、「発音、発声の苦手」と捉えるほうがナラティブやレジリエンスと相性がいいのではないだろうか。

**講義 「ナラティブとは何か？ / レジリエンスの心理学」 滋賀県立大学 松嶋秀明さん**

**松嶋秀明さんのナラティブ** 「雨降って、地固まる」という言葉がある。雨には雨の都合があり、地には地の論理と思いがあろうのだけれど、両者の

物語を結びいろいろあったが結果としてうまくやっているというようにつなげ、よりよい未来をつくろうとする言語活動のことを松嶋秀明さんはナラティブと説明し、自身のストーリーを語った。

最近、「妖怪ウォッチ」が大好きな松嶋さんの息子は父の影響で「ドラえもん」の面白さにも目覚め、松嶋さんは親子のつながりをより強く感じているのだが、ドラえもんは松嶋さんにとって自身を語るうえで欠かせないアイテムである。付き合いは小学生の頃に遡る。風邪を引いて寝込んでいた松嶋さんは母親が買ってきてくれたドラえもんの漫画を読んで、楽しく大いに笑う時間を過ごし、気がつけば症状が引き、風邪が治ったという体験をした。以来、母親は「ドラえもんは命の恩人やね」とことあるごとに語るようになる。医学的関連は別に、両者の間に因果関係を認め、家族の、松嶋さんの物語として繰り返し母親が語ってくことで、ドラえもんはいつしか松嶋さんにとって特別な存在となり、絵も上手に描けるようにもなった。それがクラスの中で「絵がうまい松嶋くん」、「ドラえもんといえば松嶋くん」の評価を生み、運動会の応援団旗をみんなに勧められるままに描き、誉められるという誇らしい経験もした。ドラえもんは今風に言えば「気になる子ども」であった松嶋さんの学校生活を支えたのである。

ナラティブの生成には「雨降って、地固まる」と語り合える相手、家族の物語として話し合える母親といった他者、それをナラティブ・アプローチでは共著者というが、そうした存在が不可欠なのだ。ここに専門家の立ち位置がある。松嶋さんは臨床心理士でもあるのだが、一般的にこうした専門家、セラピストは対象となる人を何らかの検査法等によってアセスメントするが、ナラティブ・アプローチではそれを薄い記述と捉え、両者の相互作用による「厚い記述」を求めている。そのための方法が「外在化」と呼ばれるものである。

例えば、「あなたはどのような時にどもるのか？」という問いかけは、どもりをその人自身の問題と意識させてしまう問い方だが、「どもりはあなたが友だちと話している時にどんな影響を及ぼすのか？」の問いは、吃音を自身から引き離して考察する視点を与えることになる。こうして吃音と吃音から受ける影響を分けて考え、影響を受けながらもサバイバルした、うまく乗り切ったという「ユニークな結果」を見出す。そして、そのストーリーをセラピストとともに広げていくことで問題とされることに対する新たな語り方を創造する。つまり新たなアイデンティティを確定することを目指す。問題はそのまま残り、解決されてはいない

ものの解消される。ここで示唆されているのは「問題が問題であって、人や人間関係が問題ではない」ということ。問題に対する私たちの関係が問題なのであるというナラティブ・アプローチの基本的な考え方である。

この背景にあるのが「ことばが世界をつくる」、「ことばが現実をつくる」という社会構成主義の世界観である。世界や自己を理解するために私たちが使用する言葉によって、現実はつくられるのである。例えば、一昔前なら特定の分野に詳しいことからクラスの中で「博士」と呼ばれ包摂されていた生徒が、現在では「アスペルガー障害」という診断名によって支援の対象とされるように。発達障害という概念は科学的、医学的概念ではなく社会構成主義的につくられた概念であると知るべきだろう。支援の対象として自明のものなのか、問われねばならない。吃音を障害と考えるのか、ことばの特徴と理解するのか、または発音、発声の苦手と捉えるのか。私たちに求められるのは、その言葉を使うことによってその人の人生がどうなるかという視点である。

**非行に走る中学生のレジリエンス** レジリエンスとは個人の中に見出される、困難な状況にも適応する強み、本人を支えている性向のようなもののことをいう。松嶋さんはレジリエンスは個人の中に備わっている能力のようなものというより、周囲とともに作りあげていくものだと言調する。本人に敏感に対応し、信頼関係をもつことのできる、情緒の安定した他者の存在が不可欠なのだ。

松嶋さんはそれを授業に出ずに廊下にたむろする、いわゆる「ヤンキー」や「ヤンチャ」と呼ばれる中学生と向き合い、その立ち直りを参与観察してきた経験から語る。一般的には家出は非行の始まりと理解されるが、例えば親から虐待に合っている生徒にとってその家から逃げることは、家出はレジリエンスを発揮した行為だ。非行ではないが過酷ないじめの渦中にある子どもには、不登校はレジリエンスなのだ。周囲の大人には本人のとり、ある意味でパワフルな戦略を社会的に受け入れられるものへと促していくことが求められる。本人が必要な資源にアクセスできるための「舵取り」とそれを利用できるよう「交渉」するのを援助するのである。そのためにはその生徒の真実を聴く姿勢が関わるものの倫理となる。伊藤さんはそれを対等性という言葉で表現している。

対談 松嶋秀明さん & 伊藤伸二さん

**吃音の臨床** 冒頭、伊藤さんは再度、小学2年の学芸会での担任の「配慮の暴力」で、「吃音は劣つ

たもの」のレッテルを引き受けてしまったことから吃音に悩む人生が始まったこと。セルフヘルプグループの活動の中でどもる状態の軽重とは関係なく、吃音とともに豊かに生きている多くの人々と出会い、自らに貼ったレッテルから解放されたことで人生が始まったことを振り返り、吃音否定から吃音肯定へのナラティブの書き換えが吃音の臨床の本質であると定義する。

ことばの教室の役割もここにある。通常学級で起こるであろうことにどう対処するのか、子どもが自分の課題として吃音をどう位置づけるのかを一緒に考える場。子どもの自己概念を育て、自身を語る言葉を鍛えていく場なのだ。教室で楽しく遊んでいるだけの時間であっても、子どもにとってはクラスであった辛いことから自身を回復させよう、元気を取り戻そうとしている時間、つまりレジリエンスを育てている時間なのだ。子どもが変わっていく場合は、学校では通常学級においてでしかない。親、教員、言語聴覚士などの臨床家はそれを支える存在、特にことばの教室の教員は子どもがクラスであったことを持ち込む場における、子どもの当事者研究の共同研究者の役割がある。

「転ばぬ先の杖」は、今の特別支援教育の流れでいうと環境調整という考え方だろう。しかし、人は転ぶものであり、親、教員より長生きするであろう子どもの環境を調整し続けることは不可能だ。子どもが経験し、やがてはそこから立ち直っていくであろう苦労や失敗を奪ってはならない。北海道・浦河にある精神障害の人たちのコミュニティであるべてるの家が主張するのは「苦労を取り戻す」だ。過剰な投薬で症状のみを抑えようとするのではなく、日常生活の中で繰り返す失敗を仲間とともに語り合い、自身を助ける方法を編み出すという人間的連帯に基づく実践である。

私たちはどもる子どもがどもりながら生きていること自体が既にレジリエンスを証していることに気づくべきだろう。リッカム・プログラムが導入され、これまでタブーとされてきた言葉の流暢性の訓練、指導が幼児吃音の世界に入ってきた。保育園や幼稚園であったことを親に一杯話したいと思っている子どもの、その話す内容ではなく、どもる話し方にしか注目しないこの方法は幼い子どもに否定的な自己概念を与えることになる、ネガティブな自己物語を形成させてしまうことになるのではないかと。伊藤さんが、最近精力的に幼児吃音の課題に取り組む理由はここにある。

**松嶋さんのフィールドから** 昨今、学校現場で聞かれる「気になる子どもの保護者が医療につながってくれない」との教員の発言は、発達障害と診

断されることによって何か目覚しいアプローチや特別な治療法があるのではないかという幻想に過ぎない。日常に起きる出来事に丁寧に向き合う以上のことはないと、松嶋さんはいう。

松嶋さんがフィールドとする児童自立支援施設においても同様だ。厚生労働省管轄のこの施設は不良行為をする、もしくはするおそれのある、または家庭環境上の理由で生活指導等が必要な児童が入所するところで、一般的にイメージされるような更生のための施設ではない。松嶋さんの言い方だと子どもが大事にされる場所、失敗しながらも次に進んでいける基礎を培う場所なのだ。そのために行われていることはある職員の言葉をかりれば、「当たり前の生活をするために当たり前のことを毎日当たり前にする」ということ。毎日、3度の温かい食事があり、風呂に入り、清潔な衣服と寝床がある日常の繰り返しに尽きるというが、これは決してこの職員の謙遜ではないと松嶋さんは指摘する。携帯電話もゲームもない環境ながら、「ここは案外といいところですよ」という子どもがいる。入所する子どもたちの多くはこうした当たり前が奪われ、家庭より深夜の繁華街のほうが安全であった現実を私たちはあまりにも知らない。

児童自立支援施設は子どもたちに安全と安心と、大事にされる経験を提供する場だ。それを支えるのが職員の役割だが、それは入所の期間に限ったことではない。退所後、犯罪に手を染めてしまう子どももいるが、ある意味で織り込み済みのこと、失敗も含めて子どもは前に進んでいく。必要とあれば裁判の証言台にも立つというある職員の言葉、覚悟を松嶋さんは語ってくれた。そこまでの関係性があってはじめて人は変わることができるのだ。

**再び吃音の臨床について** 長いスパンでの子どもとの関係性という点でいえば、四半世紀を超える夏の「吃音親子サマーキャンプ」を通して、伊藤さんとキャンプを支えるスタッフは子どもの成長を見続けてきた。私たちの仲間には通級を卒業し、次の段階の学校へと進学してからもその子どもとのつながりをもっていることばの教室の教員がいる。こうした長い期間の付き合いの中から、私たちはどもる子どもたちがどもりの影響への向き合い方とそれを通したアイデンティティ形成の課題に取り組み、いろいろと困難はあるだろうが、それでも自身の人生を開いていく姿を見てきた。私たちのエビデンスである。

「吃音を治したい」との子ども、保護者のニーズに寄り添うという立場、考え方は一見、当事者ファーストのようでありながら問題の先送り、臨床家として無責任なあり方だ。世界最高の臨床家

のチャールズ・ヴァン・ライパーは数千人のどもる人の臨床にあたりながら、自身を含め誰一人として治せなかったという、重い事実を私たちは受け止めるべきだろう。ライパーは最後までどもり方をコントロールすることを諦めきれなかったが、どもる事実を認めよう、自分のどもりを受け入れようと述べている。私たちはむしろ治せないところからこそ吃音臨床の専門性が立ち上がってくる、臨床家の「無知の姿勢」に基づいたアプローチが始まると考える。松嶋さんは「ナラティブ・アプローチはじわじわ効いてくるアプローチである」というが、キャンプが四半世紀、セルフヘルプグループ活動が半世紀以上の活動歴をもつのもじわじわと参加者を幸せにしているからだ。ライフステージごとに取り組める課題が一杯あり、どもる人自身も一研究者、専門家として参加できる楽しさがなければこれだけ長く、しかも手弁当での活動が続くはずがない。

## 基調提案② 「吃音と発達障害、障害者手帳」

国立特別支援教育総合研究所 牧野泰美さん

**発達障害という概念** 牧野泰美さんは吃音を発達障害と捉えることの妥当性を考える前の基礎作業として、いささか錯綜している感のあるこの言葉の概念整理から始めた。

発達障害には3つの位相の異なる概念定義がある。第一はこの概念の始まりに位置する学問的な定義である。それは知的障害を対象とし、これに関連した神経疾患等を含む広汎なものと定義される。ここには私たちが今日イメージする発達障害も含まれるが数的には最も多い知的障害がその中核で、歴史的にはここから自閉症概念が分かれていく。

第二は教育的な側面からの発達障害概念だ。2002年に文部科学省が全国の通常学級に在籍する4万人を超える児童生徒を調査した結果、実に6.3%の生徒が養護学校、盲学校、聾学校等の特殊教育の対象ではないものの、発達障害の可能性があると発表された。当時の特殊教育制度の谷間にいる存在として、その頃は「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害」と呼ばれた、今日という自閉症スペクトラム(ASD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)のある子どもへの何らかのサポートの必要性が指摘された。

この文科省の結果報告はマスコミにも大きく採り上げられ、90年代終わりごろから顕在化した「学級崩壊」現象と重ねる学校現場からの発言や報道が多く生まれた。学校生活に困り感をもっている子どもを逆に「困った子ども」と見なすような言

説が形成されたことは深い反省とともに忘れてはならないことだろう。これらの教員、学校目線からの「気になる子ども」の示す状態が第二の教育的な観点からの発達障害概念である。

第三は福祉的な側面からのものだ。2004年に成立した発達障害者支援法は教育だけでなく、就労を含めた社会における支援を視野に入れた福祉法だ。この法律において発達障害は先の3つと「その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とされ、WHO（世界保健機関）のICD-10（国際疾病分類第10版）を基に政令、省令で定められた。そこには「言語の障害」との記載があり、吃音とチックが該当すると考えられている。福祉的観点からの概念は教育的観点のものよりも広く対象を想定しているといえる。

**手帳について** 日本社会では障害者手帳は3つに制度化されている。知的障害者福祉法に基づく「療育手帳」と身体障害者福祉法に基づく「身体障害者手帳」、精神保健福祉法に基づく「精神障害者保健福祉手帳」だ。発達障害はその当事者や親、団体からの異論があるものの精神障害者保健福祉手帳の対象となっている。手帳制度には予算措置が伴うため、政府は第四の手帳を作ることをよしとしなかったのだ。

制度上、吃音は精神障害者保健福祉手帳の対象となるのだが、仙台に住む男性が吃音を理由に身体障害者手帳の交付申請をしたところ却下されたのは不当だとして、取り消しを求めた訴訟の判決が仙台地裁であり、訴えが却下されたとの報道がこの講習会の数日前にあった。身体障害者福祉法別表には「音声機能、言語機能又はそしゃく機能の障害」とあり、これらの「喪失」が3級、「著しい障害で、永続するもの」が4級とあるものの、どもりことはこれらの機能の喪失ではない。また、どもりには波があり、常に変化するので永続することもない。この判決は妥当なものだろう。仙台の男性は身体障害者手帳を使い、障害者枠での就職を目指したかったのだろうが、裁判当時こそ無職であったものの以前は就労していたことを考えると吃音が原因で就職できないわけではない。

さて、日本の福祉制度は申請主義に基づくので、手帳取得を求める人が続いていけば、今は不慣れでも医師も診断書の書き方に慣れていく。簡易化、マニュアル化は十分に予想できる。発達障害者支援法の対象に吃音が入ることも、当初厚労省は積極的にはアナウンスはしていなかったが、各方面からの問い合わせに答えていく形で段々と広がっていった経緯がある。2013年成立、16年施行の障

害者差別解消法の影響もある。そして、一つひとつの申請、裁判がやがては大きな流れを生んでいくことにもなるだろう。障害者として手帳を取得するというのもひとつの生き方、選択肢なのかもしれないが、大きな波が出来る前に私たちは立ち止まって考えるべきだと牧野さんは力説する。

**吃音を発達障害と考える前に** 吃音の基礎知識に属することだが、吃音は原因自体がわかっておらず、どもりだす時期も一人ひとり違う。発達障害者支援法にある「脳機能の障害・・・通常低年齢において発現する」の定義は当てはまらない。先に挙げた3つの発達障害も同様に脳機能の障害だとは証明されていないのである。つまり、エビデンスのない規定だ。さらに遡れば発達障害であるかどうかは何らかのバイオマーカーのようなもので客観的に判断されるものではない。アメリカ精神医学会が発行するDSM-5（「精神疾患の診断・統計マニュアル第5版」）や先のICDに記載されている「しばしば〇〇のような行動が見られる」という項目が6ヶ月以上、いくつ見られるかという医師側からの評価で判断されるのである。その特徴が6つと5つの差は一体どこにあるのだろうか。診断基準自体がスペクトラム（連続体）であり、グラデーションに満ちたものなのだ。

吃音を発達障害だと定義するには吃音と発達障害に共通する特徴を見出し、それこそが発達障害の中核的特徴だとの研究が必要になる。そのための基礎作業として、どもる人を「純粋な吃音」の人と「純粋な吃音と発達障害の重複」した人とに区別、整理してサンプル化することが必要となるのだが、そもそも定型発達と発達障害とはスペクトラムなのだから、純粋な吃音の人と重複の人とを分けること自体が不可能だろう。こうした研究が可能だとしても、その研究が吃音とともに生きようとする人に何か貢献できることがあるのか。

牧野さんは全難言全国大会45回の歴史を振り返り、「より望ましい教室のあり方」や「診断に基づいた指導のあり方」というようなテーマを経て、2016年度の島根大会のテーマが「子どもの暮らし」となったことに触れ、子どもの暮らしを支えるという点で、子どもに障害があるのかないのかは争点にはならないと喝破する。ことばの教室の役割はその子どもの日常に生きがたさがあれば、どうしたら自分を表現できるのかを一緒に考える「生き方研究所」であり、子どもの自己概念を育む場として存在する。どもりの課題は本人のアイデンティティの問題である。社会や法律に自己を規定されることから自由でありたいと思う。自分自身の中にもある社会通念や偏見に悩まされてきたこ

とを忘れてはならない。そのためのナラティブであり、レジリエンスなのであると牧野さんは当講習会の顧問として基調提案をまとめてくれた。

## 実践発表 「吃音を生きるということ

### ～子どもたちのレジリエンス～

千葉市立花見川第三小学校 黒田明志さん

**自身の強みを見出して** 全難言・島根大会の分科会発表を終えたばかりの黒田明志さんはその臨場感を岩倉に持ち込んで、語りだした。

黒田さんが自身の吃音を意識したのは大学生の頃。アルバイトの接客で「ありがとうございました」の一言が出なかった。それがどもりというものであり、実は無意識レベルで言葉を言い換え、サバイバルしていたという事実にも気がついた。そんな黒田さんは教員となり、現在は千葉市立院内小学校に勤める渡邊美穂さんという先達と出会ったことが契機で、私たちの仲間となった。

吃音親子サマーキャンプで自分のどもりについて語り合う子どもたちと出会い、ことばの教室での取り組みの方向性を掴んだ黒田さんは、瞬時に言葉の言い換えができる日常ではどもることのないどもる人である。子どもにどもりを否定することはないと伝えながらも、自身のどもる姿を隠していると感じた黒田さんは自己矛盾に悩んだ。

転機は2011年秋、べてるの家の向谷地生良さんを講師として迎えた吃音ショートコースの際に訪れた。黒田さんは「どもれない悩み」の当事者研究とその後の向谷地さんとの対話の中で、自身の悩みは子どもと真摯に向き合い始めている証拠であり、今を教員として一所懸命に生きているからであると悩みの意味づけの変化を経験した。黒田さんはナラティブを書き換えることで悩む力を自身の強み、レジリエンスとして発見したのだ。

今、どもりとともに生きる子どもの新たなナラティブ生成の場に行っている黒田さんの原点はここにある。それが実現したのはメンターと呼べる人に促され、その誘いに乗ると決断し、予定を変更して時間とお金を使い、急遽ショートコースに参加したから。このフットワークのよさこそ、黒田さんの最大のレジリエンスなのではないか。

## 伊藤伸二さんによる2組の公開面接

**幼児吃音の基本について** ことばの教室で幼児を担当している教員と保育園で発達に課題のある子どもと向き合う保育士が登場したことで、伊藤さ

んとの応答は、幼児吃音の臨床における保護者との向き合い方という点を中心に展開された。

情報過多の時代、場合によっては担当者よりも保護者の方がその信憑性は別として、情報を多くもっていることがある。幼児の吃音の自然治癒率にしても論者で異なるのが現状だ。保護者が情報に振り回されることもあるだろう。それゆえ、担当者はどういう考え方に基づいて臨床を行い、どんな展望をもって子どもと向き合っているのかを丁寧に保護者に伝える努力を怠ってはならない。親がことばの教室等に不安を感じるとしたら、それはそこで行われていることの意味がわからないからなのだ。

伊藤さんはどもる、どもらないに関係なく、幼児にとっての「遊び」の大切さを強調する。遊びの中で子どもが楽しく発する声、その呼吸がこれから豊かに育っていく言葉の基本となるからだ。言語訓練もどきは担当者にとって何事かをしている気分をもたらしてくれるだけの自己満足である。それは臨床家として誠実な態度ではないだろう。

**どもる子どもの親として** 壇上にあがった夫婦の小学5年のどもる息子は、学校でいろいろあってもあまり引きずることのない向日性のある男の子だが、思春期以降の課題にどう備えたらよいのかという問いかけを巡って、話は展開した。

伊藤さんは起きていないことに不安を感じるのではなく、何かが起こったらその時に対処すると覚悟を決めること、その上で今やれる準備は子どもと一緒に取り組もうという。それは吃音氷山説や言語関係図、伊藤さんやその他のどもる人の人生をもとに、親子で語るということである。吃音だけでなく、本や映画、音楽、スポーツも語り合う材料になるだろう。それを絵や文章で表現してみよう。書くことは自分を見つめることである。レジリエンスを育てることになる。教育職にある彼の母親は幸いにも自身の失敗、辛いことを彼に語ることでできる対等性をもった人である。豊かなナラティブが生まれていくだろう。

彼が好きな連載漫画に自分の個性を武器に戦うという作品がある。友だちとの会話で「お前の武器、個性は何だ」との問いかけに「僕はどもりながら、一所懸命に話すのが個性だ！」と答えたというエピソードを母親が最後に披露した。この講習会の初日に参加した彼は既にナラティブやレジリエンスの意味するところを理解しているのかもしれない。